

タイトルは、ユニクロの全商品リサイクル活動で全国から回収された衣類を難民キャンプに届けた模様を紹介した写真展での来場者の声。全国規模で難民支援を多くの人々にとって身近なものにしているユニクロの全商品リサイクル活動の嬉しい成果。



株式会社 ユニクロ

うる→かう→もどす→
おくる→よろこぶ

「持ちこまれるユニクロ商品を見て、こんなに大事に着ていただいているのを見ることも嬉しい」と語るのはユニクロ渋谷スペイン坂店の名田和世さん。通常の販売とは違う形のお客様とのやり取りにむしろ楽しみを見出している。「自分たちが販売して、またこのように店頭でお預かりした商品が難民キャンプに贈られ多くの方々の笑顔につながっていると思うと頑張れます」2006年9月からは、「全商品リサイクル活動」がスタートし、毎年3月と9月に店頭で着なくなった商品を受け入れる。

(株)ユニクロCSR部
小柴英子さん

「本業で得た利益の一部を、社会貢献やボランティアに取り組みさえすれば社会的責任を果たすことができた、と満足できない時代なんですね。本業とは別に考えるのではなく、本業そのものへの取り組みのなかで実行してゆかなければならない。日常的な企業の姿勢が問われているのです」と全商品リサイクルを始めたきっかけを説明する。また「ただ単に配布をするだけではなく、お客様の善意を胸に、私たちの心も一緒に届けなくてはならない。難民の閉ざされた生活の中で衣服がほんの少しでも楽しみや潤いを感じられるような支援を工夫したい」

Fashion

あっ、私と同じ フリース着ている



ユニクロの全商品リサイクル活動を通じた 普段着の難民支援

(株)ユニクロ 執行役員
新田幸弘さん

と、再利用される衣類を現場のニーズに合わせて分類し、倉庫で一時保管し、UNHCRで一番必要としている地域に送り届ける。社内のボランティアグループにも関わっている小柴さんは、社員が関わるこの活動を現地での難民の人々が喜ぶ顔を見たときに、「ああやってよかったな、とつくづく思いましたね」



ネパール、ベルダンギキャンプで衣類を届けようとする難民 ©上岡伸輔

「入口から出口まで責任を持って、自分たちの目で確認してこの活動を継続することが重要です」と、自ら「全商品リサイクル」活動の各場面を体験し、CSR部を率いる新田幸弘さん。ネパールやタイの難民キャンプで「食糧、水、薬品のように優先されるものは配布されても、資金が滞ると、よほどの寒冷地は別として衣料品は我慢できるもの扱いになってしまいます。難民キャンプでは衣料品の配給が不足しており、その対応を考えなければいけない時期にさしかかっていたというタイミングで、ユニクロの新しい取り組みが無理なく一致することになりました。何よりも受けとった難民の笑顔が励みになります」

新田さんと小柴さんはネパール、タイに続き、ウガンダとタンザニアの難民キャンプに衣類を届けに行かれる予定。

関連情報：
<http://www.uniqlo.com/jp/corp/csr/>



Fashion

©UNHCR

UNHCRユース立ち上げ直前の座談会で、菊川怜さんは2年前初めてケニアのダダブという難民キャンプを訪問したときの印象を語ってくれた。女優、タレントとして多忙を極める菊川さんがUNHCR駐日事務所のスペシャルサポーターとして活動を始めて3年が経とうとしている。その間、難民キャンプを訪問するだけでなく、所属するオスカー事務所の女性タレントと運動会をして募金を集めたり、ヤフー知恵袋やユニクロ・ファッションショーを通じて難民問題について伝えるメッセンジャーの役割を果たしてくれている。

女優、

菊川怜の祈り

遠く見えるけれども、
じつはすごく近いんだと



UNHCR駐日事務所
スペシャルサポーター・
女優
菊川怜さん

「難民キャンプでも子どもはほんとに元気ですよ。そして、自分の意見が結構しっかりあったりするんです。政治家になりたいとか、サッカー選手になりたいとか、お医者さんになりたいとか。将来を変える力のある職業を目指す意識が高いところがあって、びっくりしました。しかも嬉しそうにいうんですよ。私だったら、いつここから出られるかわからない、くじけちゃうと思うんですけど、すごく目が強かったので驚きました」

Fashion

「僕は自分が難民だということを周囲の人たちに話すことにしました。インシュタインもオードリー・ヘプバーンも自分が難民だということを自信をもって話してきました。僕はそのことに深く感銘し、僕も自信を持って歩いていくことを決めました」

焼けた肌に長髪姿の青年が、長いまつげを揺らしながら静かに語る姿は、およそ難民の持つ一般的なイメージとはかけ離れている。ザニーさんは、1988年のミャンマーの民主化運動に参加して日本に逃げてきていた父親を頼って、9歳のとき日本にやってきた。小中高と日本の学校に通い、その後雑誌やショーなどでモデルの仕事をしたしながら2007年3月に亜細亜大学を

ザニーさんの挑戦

P.S.

I am a Refugee



卒業し、今は青山骨董通りに本社を置く2社のファッションブランドとデザイン契約を結びプロデュースに参加している。

ザニーさんは、仕事柄のイメージのため難民であるという出自をこれまでなるべく隠してきた。「でも今は世界の現状、世界の難民問題を、より多くの方々に知っていただくことが一番重要で、僕はその広報役としてなんらかの形でお手伝いをしていきたいと考えています。その一歩として僕の関わっている全てのアパレルの店舗にUNHCRの募金箱を置くことを検討しています」

©篠原善太郎